

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

Gothic Lolita Student Council
ゴスロリ生徒会
紅薔薇の悦宴

小説 狩野 景

挿絵 K E G



登場人物紹介

Characters



きら 沙羅・ローゼンハイム

気が強く、人前では尊大な態度を取る生徒会長。幼馴染みの達紀に好意をよせているが、素直になれずにいる。



ひむら たつき 緋斑 達紀

少女と見間違えられる程の美少年。その外見がコンプレックスとなり、普段は男らしく振る舞おうとする。

るりかど まゆる 瑠璃門 真由留

達紀の恋人。物腰は静かだが芯の強い性格で、納得できないことには一歩も引かない。まだ処女。

ひむら ゆう
緋斑 悠

達紀の義姉で、沙羅の親友でもある。
人の困っている姿を見て楽しむとい
う、ややサドッ気のある性格。



いずみ ふう か
泉 風花

花音とそっくりな双子の妹。花
音とは反対に、物静かな性格で、
密かに達紀を想う。



いずみ か のん
泉 花音

生徒会で書記を務める、風花の
双子の姉。表情豊かな美少女で、
達紀に一目惚れしてしまう。

第一章

生徒会へいらっしやい

第二章

可愛い双子が狙ってる

第三章

黒いドレスとお姉さま

第四章

紅薔薇姉妹の契り

三角襟の赤いブラウスの上に裾をフリルに飾られた黒い燕尾のジャケットを着て、背面の腰の高さで黒いリボンを大きな蝶結びに止める。黒い紐で飾られた袖口は優雅に大きく広がり、中から赤いブラウスのフリルが鮮やかに覗いていた。

膝丈までの赤いスカートもフリルで彩られ、細い脚を包む白のニーソックスとコントラストを描く。長い横髪が特徴的な頭には赤いリボンを結んだ黒のミニハットを被り、気品に満ちた少女の容姿に愛嬌を加えていた。私服のときには、白いワンピースなど清楚な格好が似合う。だが、悠にコーディネートされた扇情的な生徒会服は、彼女の潔癖そうな容姿から背德的な魅力を引き出していた。

外見だけではなく、生真面目な性格も頑固なところも、達紀の心をときめかせる。自分にはない気品溢れる佇まいは、ただ側にいるだけで心を落ち着かせてくれるのだ。

真由留を失うなんて、身体を引き裂かれるよりもつらい。だが彼女は一向に彼と向き合う素振りを見せなかった。

「……謝って許されることじゃないけど、ごめん。あの場所の、変な雰囲気におかしくなっちゃって……あんなことを……」

部屋を満たす甘い香りと、深い味わいの紅茶に欲望の歯止めがきかなくなっていたような気がする。真由留のカップに盛られていた痺れ薬のように、なにか性欲を催す物が入られていたのかもしれない。そもそもあの義姉に連れていかれたことを考えると、それ

も不思議ではなかった。でもそれもすべて言い訳に過ぎない。

「そうね……確かに謝られても許せることじゃないわ。まったく、馬鹿じゃないの？ あ、あんな幼馴染みだかなんだか知らないけれど、淫乱女にたぶらかされて!!」

不満をぶつけている内に怒りが込み上げてきたのだろう。真由留の声が怒鳴り声となる。

「だ、だから、俺が悪かったって……」

それでも許しを請うとするのだが、一度怒りをぶちまけた彼女の勢いは収まらない。

「それに、あんな子供にまで手をだしてっ！ エッチできれば誰でもいいんでしょ!?!」

「な、なんだとっ!」

元々温和な性格ではない。むしろ頭に血が上りやすい性分だ。ここぞとばかりに責め立てる真由留に、達紀の顔がムツとなった。

「あの娘たちは、朝、困ってるの助けたただけだ。関係ねーだろっ！ お前だって、姉貴に

乳揉まれて気持ちよくなってただろがっ!! お、俺には触らせてくれもしねーくせにっ!」

売り言葉に買い言葉で反撃してしまう。

「あんなとこしゃぶらせて、関係ないもないでしょ。それに、あなたのお姉さん、前から思ってたけど、ちよっとおかしいんじゃないっ!? あんな菓飲まされたら誰だって変になるわよっ!!」

悠の愛撫で喘いってしまったことを持ち出され恥ずかしそうに顔を紅潮させるが、ここぞ

とばかりに恋人の義姉への不満をぶちまけた。だがその顔が突然、悲しげに歪むと声をわずかに震わせて続ける。

「そ、それに……それに、なによ、みっともない顔でけだものみたいにさかつちやつてっ！ そんなにエッチしたいんだったら、これから毎日、あの女とすればいいわっ!!」

一瞬の静けさが訪れる。

「——俺と別れるっていうのか……?」

押し殺した声で少年が尋ねると。溢れる感情を堪えるような顔つきで真由留が頷く。

プツンとなにかが達紀の中で弾けた。

いきなり彼は少女に飛びかかると、驚いて逃げようとする身体を背後から押さえつけた。「きやああっ！ な、なにをするのよっ!! やめないと、さ、叫ぶわよっ！」

「う、うるさい！ 黙れっ!!」

助けを呼ぼうとする真由留を乱暴な言葉で脅し、達紀はギュッと情熱的に抱きしめた。

「お、俺がしたいと思ってるのは、お前だけだっ！ それなのに、別れるだと!! ふ、ふざけやがって……どれだけ、お前が好きか、知らないくせにっ！」

不器用な性格そのままのけんか腰な告白を叩きつけてむしゃぶりつく。

「い、いやっ！ 放してっ!!」

「逃れようと藻掻く真由留の抵抗が、心なしか弱まったように感じる。がむしゃらに後ろ

髪へと顔を埋め込みしがみつくと少年に、わずかながら表情が弛んでしまっていた。

「こんな……こと、で、ごまかされない、からあ……。許してなんか、あげ、ないっ!!」

言葉は拒もうとしているのだが、首筋に息を吹きかけられうっとりとした表情を浮かばせて真由留の身体から力が抜けていく。

「真由留の髪って、いつもいい香りがする……」

香水のように豪華な物ではない、清楚な花に似た心地よい素朴な甘香にうっとりとなる。

「——たつ……き……。——はうっ!!」

ドレスの上から乳房に手を被せると、彼女は悩ましい喘ぎをこぼしてしなだれた。真新しい布地の滑らかな手触りに、豊かな乳房の感触が重なり指先を包み込む。

「く……あう、だ、だめえ、達紀い……。ふう、あくんっ!! はんっ、あふううっ!!」

揉み弄るごとに柔らかさを増す球肉が指の中で形を崩す。真由留の喘ぎが熱を増し、色香に満ちてきた。手に馴染んだその感触に、達紀の興奮も頂点へ達する。絞り尽くされたはずのペニスが疼痛を感じるほどに強張り、密着した恋人の尻肉を圧迫していた。

触るほどに溶けてゆく。手のひらに感じる乳房に負けぬほど柔らかな乳房に埋まり込み、衣服越しだというのに肌を触れ合わせているような気持ちよさが脳を蕩かす。彼女も硬い感触に疼きが膨れあがり、もじもじと尻を振らせ恋人の股間へ押しつけてきた。

「ああ、こうしてるだけで変になっちゃう!! えっち過ぎるよ、真由留のお尻いつ!!」

「はんっ、だつてえ達紀がおかしくするからっ！　もう、私も……あはあああっ!!」

もう堪えきれないとばかりに少年がスカートを捲り上げた。漆黒の布地の下から、可愛らしい淡いピンクのショーツが姿を現す。その股間はすでにたっぷりと愛液が溢れ返り、クロッチ部分をじつとりと濡らしていた。

「もう……もうこんなにびしょびしょなのに、まだ溢れてきてるよっ！」

興奮に声を上擦らせ達紀の指がその下着を引き下ろす。

「い、いやああ……」

恥じらいに、より一層量を増した愛汁がこぼりと湧き出し腿を伝う。

(真由留、こ、こんなエッチだったなんて……)

彼女の清楚な佇まいにセックスなど嫌いなのかもと不安を抱いていた。だが、汚れを知らぬかのような整った顔は、物欲しそうな表情を浮かべ少年を誘惑している。

後ろからだど丸見えになってしまう鳶色の菊門がもじもじと蠢く下で、大きく綻んだ花弁は、発情の薄紅に色づき小刻みに震えている。生々しく濡れ光る粘膜の割れ谷に、中が覗けそうなほどに深い肉穴が口を開けていた。達紀が知っている生真面目な恋人とは思えぬ淫靡な様に、息を呑んで見つめてしまう。清らかな顔の下にこれほど淫靡な肉欲を潜めていたのかと思っただけで、ますます彼女が愛おしくなり興奮してしまふ。

(い、挿れたいっ！　真由留の膣奥につ!!　も、もう、俺っ！)

その入り口に迷わず怒張した肉の矛先を宛がう。ぐじゅん、と溢れ汁を押し崩す感触はいくらか強張り、身構えているようだった。細心の注意を払い、そつと腰を押し出すと綻んだ花弁がぬっちゃりと広がり亀頭をそつとくわえ込む。途端に、染みるような熱さに満ちた濃厚な液汁が溢れ、竿を伝い流れる。

(これが真由留と俺の、初めてなんだっ！ やつと真由留を抱けるっ!!)

思わず沙羅との感触が思い浮かびそうになり必死で振り払う。この心地よさをなにとも比べたくなかった。それをしてしまったら、真由留にも沙羅にも失礼だ。

怖々と確かめるようにまわりついてくる陰唇の感触にうっとりしながら、達紀は恋人の処女腔へゆつくりとペニスを潜り込ませた。

にゅぶじゅっ！

裏筋を魅了するぬめりと熱さが濃さを増す。

「ふあはあっ!!」

揺れ崩れた驚きの嬌声が少女の喉からこぼれ出た。悩ましく顔をしかめているがその瞳は喜悅と期待に輝いている。

「真由留っ！」

恋人の名を叫ぶと彼はバックから腰を押し出した。

ぬぶっ！ ぶずぶずぶっ!!

溢れ液が淫靡な音色を大きく奏でる。緩みほぐれた牝穴をさらにこじ開け、達紀の勃起竿が奥へと押し入ってゆく。

(んああっ!! くううっ!)

狭い腔にきつく締めつけられ、気持ちよくて変になりそう。求めていながらも理知的な分だけ、破瓜への恐れが残っているのだろう。その硬さが真由留のヴァギナに官能的な動きを与えていた。

達紀の勃起が奥へ潜ろうと襜壁を刮げれば、湧き上がる激感に震えながらより狭く引き締まる。密着度が高められ、お互いに気持ちよさが何倍にも跳ね上がった。

「ひはああああああっ! くふっ!! はうう——んっ!」

破瓜の痛みを洗い流す歓喜に、真由留は清楚な顔立ちを淫らに染めた。尻を突き上げながら、窓にもたれかかり身をくねらせる。その瞳に、放課後の校庭で部活動に勤しむ生徒たちの姿が目に入った。

「はあうっ、達紀、ここだめっ!! 外に声聞こえちゃうからっ! 動いちゃ、だ……めえ……あふああああんっ!!」

達紀も当然気づいていた。なにかの拍子にこちらを見られれば、悩ましい顔で喘ぐ姿がばつちりと見られてしまうだろう。

(ど、どうしようっ!! でも、気持ちよくて……っ!)



もし誰かに知られたら明日には学校中に噂が広がってしまう。自分だけならまだしも、恋人までみんなに変な目で見られてしまうのだ。

それなのに、危機感が興奮を加速させてしまう。準備運動を始めた部員たちが上体を仰け反らせるたびに、視線が合いそうになりドキドキとする。だが腰は、ますますストロークを激しくして膣奥を突き抉ってしまう。真由留の膣も、危機を感じるたびに締めつけを強め、ねだるように愛液の量を増してくる。

ぶちゃっ！ ずちゅっ！！ ばちゅんっ！ ずっちゃ！！ ぶじゃんっ！

バックからの深い突き込みに液汁が圧迫され、少女のヴァギナがはしたない音色を響かせる。突き上げられるたびにペニスが子宮壺を豪快に拉げ、真由留の美貌を惚けさせた。

「くう……や……はっああああっ！ だ、だめ……んく……あ、ふう——んっ！！」

声を出さぬようにと堪えているようだが、膣壁がペニスを締めつけるとともに、甲高い喘ぎが漏れていた。

「だめ……だ、腰っ、止まらないっ！」

波状に蠢く膣にペニスを刺激され達紀のストロークも勢いを増す。

「はああうっ、もう、だめえ！ これえ、イッチャふ、わたし、いっっちゃうううっ！！」

響き渡る艶かしい声に、運動部の部員たちがきよろきよろと辺りを見回していた。

「だめ、だめえ、だめっ！！ はああっ、イイイイイッ！」

スリルに増幅された快樂に、キュンキュンと子宮が脈動を繰り返している。突き込まれるたびに溢れる愛液の量が増えます。床にねっとりとした水滴を垂れこぼす。

「ああっ、気持ちいいっ！ 真由留のおま○こイイっ!! 前からずっとしたかったっ！」
「わ、わたしだっつ！ んひあああっ!! 達紀と早くしたく……て、はうんっ！ あんな、女に先、されて……いやああっ!!」

互いに求めていながら純情さが邪魔をしていた。今日まで堪えていたものを取り返すように、二人は快感を貪って敏感部を激しく捏ね合わせる。

上気した肌から官能汗の甘酸っぱい香りを立ち上らせ、蕩けた表情で尻を弄らせる。柔らかな膣壁が陰茎を締めつけながら、裏筋から鈴口まで敏感箇所を絡ませてきた。

「ふああ、き、気持ちイイっ！ はわっ、だめ……だ、出ちゃうっ!!」

竿のつけ根が熱くなり脱力を伴った快感が疼いてくる。奥からなにかが膨れ、急激に陰茎を迫り上がってきた。

「あんっ！ だ、出してっ!! 達紀の、私の膣内にい！ あの女より、いっぱい射精してよおっ!!」

抜こうとするのを拒むように真由留の膣がきゅううっ！ っと強く太棹を握りしめた。沙羅への嫉妬だろうか、清楚な唇からはしたくない言葉を叩きつけてくる。

（真由留がそんなことっ！ ああああっ、たまらないっ!!）

とっさに思いついた言い訳を上擦った声で告げる。その最中に、達紀が奥まで押し込んだ陰茎を抜けるギリギリまで引き抜き、即座に叩きつけるように根本まで突き挿れた。

どじゅんっ!!

恥骨同士がぶつかり合い、圧迫された狭穴から溜まりに溜まった淫液が噴出した。

「——こぼしてしまつてっ。……はああ……や、だめえ……」

不意打ちのストロークに狭台の上で瘦身がカクカクと踊った。一瞬白目を剥いて、だらしなく顔を弛め鼻にかかった嬌声を張り上げてしまう。

「……あ、あなたにしては珍しくドジねえ。それにしても、いくら慌てたからって、変な声で驚かないでよ。なにごとかと思つたわ」

なにか変な雰囲気な調子を含みながらも沙羅が納得する。だが悠には、それを安堵する余裕もなかった。激しい一突きを食らわせただけでは飽きたらず、達紀はそのまま抽送を繰り返して続ける。カリ首が膣壁をめぐり返し柔管と硬竿の肉同士が擦れ合い、じゅぶっ、ぐじゅぶっ、と愛液が艶かしく音を奏でた。赤黒く染まった極太の物が出入りする勢いに、こじ開けられた花弁が大胆に振れ粘りつく飛沫を断続的に噴きこぼす。

「そんな……う、動いてはあ……ああつ、イイッ……だめですつ、達紀とまつてえ……」

しかし快樂に陶酔した少年の欲情は収まらない。言葉では拒みながら悠自身も、すぐにとろんとした眼差しで口元から涎を垂らし、喜悦に惚けた表情となつてしまう。

「そんな顔してるくせに……な、なら、やめるよ……ん、んくう……」

きゅんきゅんと収縮を繰り返す義姉のヴァギナは心地よくて、いつまでも掻き混ぜていたい。だが達紀は衝動を必死に抑え、姉の望む通りに腰の動きを止めた。

「はああああっ、い、いやあ……とめちゃ……あつ、あふう……」

だがストロークを中断した途端、彼女の方から望んだというのに、悠の口から不満の喘ぎが発せられた。しまったといった様子で口元を両手で覆い顔を真っ赤に染める。

「なんだよ、あ、姉貴がやめろって言うから、せっかくやめたのに……」

呆れ果てたといった調子で吐き捨てた。なんと悠は大きく開いた両足を弟の腰にしつかりと絡みつかせ、もっと奥へ極太を迎え入れるように引き寄せていた。そして自分から激しく腰をグラインドさせ、挿入されたままの達紀のペニスでヴァギナを穿っていたのだ。

「ひい、ち、ちがふっ……腰、勝手に……ふあ、あ、あはあうん……い、イイ……ッ」

無意識のうちに動かしてしまっていたらしく、自分で自分の痴態に驚く。止めようとするが、意識した途端余計にくねりが過激になる。子宮が吐き出す液汁の量も増したのだらう、びちゃ、びぶじゅ、と淫靡な音色が響き、甘く発酵したような牝臭が濃厚になる。

「いまなにか言ったかしら？ ちよっとはつきり聞こえなかったんだけど」

快感が膨れあがるにつれ大きな声が出てしまい、表にも届いてしまったようだ。

「くう……達紀……が、お化粧、き、気にいらなかったらしくてへええ……」

腰の蠢きを抑えられぬまま、しゃくり上げるように息を荒くしながらも、義姉はどうか沙羅に答えようとす。そのときを狙って、達紀は途中まで引き抜いたペニスを右手で握り、膣壁の上に亀頭を押しつけるようにしてオナニーするみたいにしごいた。

「——やめて……たつきい……そ、そこ……変……に……なるう……んくっ」

Gスポットに陰茎を揺さぶる妙な振動を加えられ、子宮がバクバクと脈打って暴れる。ぶじゅばつ！ と、男が射精するみたいに、濁液の塊が吐き出されペニスと膣壁の狭間から勢いよく飛沫をあげて少年の下腹をべっちよりと濡らした。

「姉貴……い、いまのでイッチャったの？ 少し動かしただけなのに……」

「そ、そんなあ……達……紀が意地悪する……から……」

いつもは達紀が義姉にからかわれているというのに、立場が完全に入れ替わっていた。目の前で横たわる姉が自分の言葉に、悩ましい色香を滲ませ困惑する。その様を見ていると背筋の産毛が逆立つほど興奮してしまふ。

「なに言ってるのか、わからないわよ。どうしちゃったの？ 変な声出しちゃって……なんか、それって、エッチなことしてるような……」

妙な雰囲気漂わせる室内に、真紅の少女が剣呑なつぶやきを漏らす。

「ひう、ちが……はあわ……い、いやあ、そこは……」

その疑惑への答えも、ドレス少年の容赦ない手が邪魔をする。浅い挿入でゆっくりとう

ねるように掻き回し膣に意識をおびき寄せておいて、彼は十字架を飾ったネクタイを緩め、素早くブラウスのボタンを外してしまった。はらりとほだける胸元から、黒いレースのブラジャーに包まれた美球がこぼれ出る。巨乳といえる沙羅や真由留に比べると小振りに見えてしまうが、十分に豊かな膨らみを持ったツンと上向きに頂上がある理想的な形のメロン乳房。達紀は邪魔な黒布を早速押し上げながら、両手で左右の房を無遠慮に掴んだ。

「くふあ……だめいや……い……いじっちゃ、もお……」

少し力を加えただけで、指が深々と埋まり込む極上の柔らかさが手のひらを満足させた。揉めば指先にねっとりとはばりついてきて、いつまでも歓喜をもたらす。そして膣への挿入だけでもまいってしまっている乱れ姉から、さらなる悩ましい泣き言を絞り出した。

「ち、乳首すぐく立っちゃってる……。ブラと擦れて、き、気持ちよかったのかな？」

「……だ、だって……どうしてそんなこと言うのですう……？」

少し大きめな乳輪の真ん中に親指大にまで乳首が膨れあがり、赤紫に色づいてひくひく痙攣し続けていた。その勃起乳首と同じくらいに頬を染めてイヤイヤする。

「じゃ、じゃあ、こんなことしたら……姉貴、どうなっちゃうの？」

弱々しく乱れる悠の痴態に生唾を飲み込み、達紀は興味たっぷり、感度の高まっている乳首を指先で交互に弾いた。

「——!! きつはあ……ひいああ……」

ぺちん、ぴちん、と爪の先がヒットすると、紅色の粒勃ちが勢いよく跳ねて房球が波打ち揺れる。激感に悠は全身を硬直させ、息を詰まらせた。苦痛なのか快感なのか区別のつかぬ切羽詰まった表情を浮かべながら、膣穴が何度も収縮し剛直を締めつけてくる。

(あ、姉貴、おっぱいいいたぶられてこんな悦んでるなんて、身体エッチすぎるっ！)

思いがけない反撃にもぞりと下腹の奥が沸き立ち、達紀は密かに呻いた。女物のドレスで着飾って姉を犯すという背徳感だけでも、気が遠くなりそうな興奮が渦を巻いている。

その上いつになく弱々しさを見せる悠を責めれば責めるほど、魅惑的な女体は悩ましい快感を投げ返してきた。このままでは、いつ情けなく果てて彼女がイクより先に精液を漏らして萎えてしまうかわからない。おまけに姉を苛めるため利用しているが、扉の向こうで中を窺っている沙羅の存在も気が気ではない。

「なんだかあなたたち怪しいわよ。返事しないなら、鍵を持ってきて中に入るから！」

案の定気の短い幼馴染みは、問いかけても部屋の中からは喘ぎ声のような、くぐもった答えしか返ってこないことに苛立っていた。

「ひあ……らめえ、達紀と……おま○こしてりゆの……ばれひゃふう……」

涎と涙を呆けた顔に垂れ流し、またしても弟の陰茎を味わおうと腰をくねらし始めた悠には、すでにまともな会話などできそうにない。

たがが外れた女陰は軟体動物のように蠕動し、くわえ込んだ幹の根元から先まで緩急を

つけて締めつけてくる。たっぷりのぬめり液を含んだざらざらの褻壁は、しつかりと密着したまま裏筋や鈴口を執拗に刺激した。

何度も熱い塊が竿のつけ根で膨れあがり、脱力的な快感を呼び起こす。排泄欲を甘美にしたような疼きに何度も放つてしまいそうになる。さすがにこのまま快楽に意識を飛ばしてしまつたら外の幼馴染みに、狂おしい声を聞かせてしまう。

「ご、ごめん……沙羅。その、慣れないドレスで、ちよ、ちよつと取り乱しちゃつて……。えと、きちんと準備できたら、すぐに向かうから、その、ご、ごめん……！」

「達紀……そう、わかつたわ。じゃあ、礼拝堂に戻るから……」

絶頂の寸前で耐えながら、達紀はしどろもどろに彼女を礼拝堂へ戻らせようと説得した。もつれながら話すのも、恥ずかしがっているせいだと思つたらしい。まだ名残惜しそうな様子だが、沙羅は少年のお願いを聞き入れた。

しかし彼女が去るのを待てぬほど、達紀の我慢は限界を超えていた。少女姿の美少年が、ティーワゴンの上に寝そべつた義姉にのしかかる。黒のスカートが翻り、捲れ上がったアシンメトリーの裾からは、女の子にあるはずのない極太がそそり立ち、銀髪の股穴へ突き挿さる。上体を半ば起こした悠の腰を抱きかかえ、もはやワゴンには尻をちよんと乗せさせたままで、達紀はガツンガツンと音が響きそうな剛直の抽送を繰り返していった。

「んひゅああ……はあ、あはううっ！」

カリ首が見えてしまうほどギリギリまで引き抜くと、逃すものかと牝鬣が狭まりしつこく絡みついてくる。義姉の喉からも渴きを恐れ早く挿入してとせがむ呻きが滲み出る。

だがもう次の瞬間には、恥骨を砕こうとでもするかのような全力で、達紀は腰を悠へと叩き込む。飢えて絞ったように狭くなった膣穴を先端の鈍い太竿が容赦なくこじ開けた。
(くあ、ぐちゅぐちゅま○こなの、狭くなってるっ!!)

粗い鬣の膣壁が肉鏃に擦れる快感がたまらない。途中からどんどんと速度を増した一撃は、刺し貫くほどの衝撃で快感を待つて微震する牝蜜壺を直撃した。

「かっはうあああああっ……ひうんっ……くっはああ……」

狂ったように端正な顔が悩ましく歪み、じたばたと長い脚が暴れて弟の腰にしがみつく。びじゅっ！ ぶべじや、べじゅぶっ!! ばちゆん、ぶしゃばっ！ べっじやんっ!!

際限なく量を増やし続ける潤滑汁で、擦れ合う音はますます高らかに響く。背徳の興奮に任せた深い抽送は高速を保ち、二人の絶え間ない嬌声が息苦しそうに上擦る。

(くふああ、姉貴の……悠のおま○こ、なんなんだよっ!? 気持ちよすぎだっばっ!!)

長い間近くにいながら、今日まで交わらなかつたことが惜しくさえ思ってしまう。必死に堪えてきた竿奥の噴出欲がもう持ちそうにない。悠の子宮も、亀頭がぶつかるたびに普通じゃない激しい痙攣を起こして竿を揺さぶってくる。

「ひいあ、くる、なにかきますわ……ああ、これえ……すごいすごい溢れますわ……」

叫びたいのを押し殺し、弟の肩口に爪を立ててしがみつき耳元で狂おしく囁いてくる。

「くあつ、俺……も……で、射精ちやう……ああ、膣外そと出さなくっちゃ……」

もう歯止めがきかない。このままでは義姉の膣内へぶちまけてしまう。しかし腰を引こうとする弟を許してなるものかと、悠は手脚を絡みつかせ股間の密着が弛むのを拒んだ。

「それじゃ、もうあたしいくわね。早く支度終えていらっしやいよ」

扉の外ではようやく沙羅が立ち去ってゆく気配がしていた。廊下を遠ざかる上品な足音を追うように感極まった叫びが弾ける。

「はうあつ！ も、もう、イクッ!!」

「わ、わたくしも、んふああああ、だめ、い、イクううううっ！」

堪えに堪えた官能が決壊し、たくましく屹立した怒張へと押し寄せた。もの凄く熱い物が快感を渦巻かせ尿道を駆け上ってくる。悠の胎内も子宮が膨れあがり、ぐつぐつと坩堝のように煮えたぎっていた。ヴァギナが勝手に収縮し男根を強く締め続けている。

「巨竿の根本がどくと大きく脈打つ。」

「ふわはあ——っ！ んんうふううううあああああはっ!!」

「つつああつ!! んんっ、ぬくあつはあつ！」

全身が硬直する一瞬の緊張の後、二人は激しい脱力に見舞われた。

——ぶっちゃああああつ!! びふしゅうううううっ! ぱじゅっ、じよぶびばあつ!!

びゅっ！　びゅどどぼっ、べびゅ！！　びゅぼぼぶべばばあ——ッ！

辺り一面に饅^すえた甘酸っぱさが広がら脳裏を蕩かす。二人の中から噴出された大量の液濁はヴァギナと剛直の狭間で灼熱を生み官能を煽った。ドレスの内側をべちよべちよに汚しながら、混じり合った淫液が噴きこぼれあちこちに飛び散る。自分たちの顔にまで飛沫を跳ねさせながら、深く繋がり合った姉弟は見つめ合い、互いの絹肌を舌を這わせる。

「ふああ……こんな格好が、気持ちいいなんて……」

女装姿で精液を噴きこぼし、まだ興奮が収まらぬ様子で朦朧とつぶやく。絶頂の波はいつまでも二人の身体をヒクヒクと脈動させ続けている。

「こ、これから毎日、あなたもドレスでイッて、いいのよ……さあ、参りましょう。皆さんが達紀を待っていますわ。ドレスを着た乙女の、楽しい宴に……」

脱力した弟を愛撫しながら悠がワゴンから降りると、じゆるぶっ、と腔からペニスが出て残った白濁をぼとぼと落とした。亀頭が襷を最後に刮げてゆく切なさに小さく呻きを漏らし、彼女は未だ硬さを失わない彼の陰茎を綺麗に舐めて清めた。

乱れた衣服を整え、露わにされてしまった淫らな器官をレースの下に隠す。二人は淑女の佇まいを纏うと、紅薔薇の離宮の盟友が待つ礼拝堂へしずしずと向かっていった。

聖なるレリーフが刻まれた重い扉が開き、眩しい陽光を背に二人が入ってきた。



十字架をあしらったネクタイと腕章が印象的なロングスカートのドレスを纏う姉にいぎなわれ、弟は左右非対称なスカートが際だつ漆黒のドレスに身を包んでいた。

知らぬ者が見たら、いや、彼が男だと知っていたとしても、その姿に言葉を失い、息を呑んだであろう。事実、生徒会の委員たちもただ呆然と達紀に見とれていた。

「ほら、皆さん、達紀に心を奪われていますわ。そ、それにしてもあなたの精液、多すぎましてよ。こうして静かにもあるいても、ち……膣内からこぼれ出てしまいますわ」

とろとろと生暖かい流れが股間から溢れ内腿を伝い落ちていく。その様は長いスカートのため、誰にも悟られることはなかった。

「ば、ばか……変なこと言われると、また勃ってきちゃうじゃないか……」

艶かしい状態を耳打ちされ少年の下腹でも、疼きが強くなってきた。きつてしまう。

「どうしたの達紀ったら。なんていうか、すごく色っぽい」

「ええ、ドレス着てるからってだけじゃなくて……」

珍しく沙羅と真由留が意見を同じくする。

「なんだか見てるだけでどきどきしてきちゃうね。って、風花ちゃん顔が真っ赤だよ！」

「う、うん……。——お、お兄さま……」

双子までもがその場に立っているのも大変な様子で、互いに支え合いながら達紀から目が離せないでいる。少し頬を赤らめ目を伏せるその少年は、情欲に身を任せた直後の気配

を漂わせ、狂おしい色香で少女たちを動揺させてしまっていた。

「……くふああ……き、きちやう……達紀のお……だ、だめえ、やだああ……」

脚肌を舐められただけで喘ぎが止まらないのに、そんなところを穿られたらどうなってしまうかわからない。期待と恐れに沙羅が惑う。あともう少し……。だがその興奮がさらに溢れる愛液の量を増やしてしまった。

（くあ、こ、この香り……頭蕩けてっ!! も、もうっ!）

口腔に流れ込む牝味に加え、鼻孔を満たす甘酸っぱい発情臭が少年の許容を上回った。

「ぬわんっ!!」

鼠蹊部そけいを無視して腿から一足飛びに達紀の唇が沙羅の股間にむしやぶりつく。

「ひあああつ! そんな、もうっ!! ——かふあああああつ!」

意表を突いた強襲に少女が衝撃を受けた。

窄めた舌先を割れ目の奥へ凶々しく潜り込ませると、腔口から湧き出す蜜を直接掻き出すように、手前に勢いよく舐め穿る。小陰唇を巻き込みながら恥骨へ向かって牝股の曲線をなぞりあげ、達紀の舌は包皮から勃ちはみ出たクリトリスを容赦なく刮げた。

「——きいひい——っ! ひゃふああああんっ!!」

軽い絶頂にぶじゃんと熱い飛沫がヴァギナから飛び散る。弾け飛んだ理性に飾ることを忘れた歓喜の声を高々と張り上げ、沙羅は続けざまに激しい痙攣を繰り返す。

両脚が完全に脱力してしまった。少年の肩で支えていた少女の身体が崩れ落ちる。

溢れ返ったたつぷりの愛液で喉を潤しながらへたり込むように尻をつき、達紀は幼馴染みの華奢な肢体を抱きかかえ受け止めた。

真紅と漆黒の優雅な布地が重なり合い、淫靡な色合いを生み出す。淫らな液汁をたつぷりと吸い込み、妖しい衣擦れに甘酸っぱい濃厚な情欲臭を撒き散らす。

見守る少女たちに羨望の吐息を漏らさせて抱き合う美貌の姉妹。真紅のドレスを纏った姉を抱き留める妹の夜のように黒いスカートの下では、急角度でそそり立つ男根が濡れ綻んだ姉となった沙羅のヴァギナにその狙いを定めていた。

「やつと、契りが結べる。俺……わ、わたしたち、姉妹になれるんだねっ！」
はにかみながら乱暴な言葉遣いを改め、ドレスの少年が心を浮き立たせる。

「ええ、あたしの達紀……あたしの可愛い妹っ!! さあ、激しくあたしを突き上げてっ！」
真っ直ぐ見つめる瞳を優しく受け止めながら彼女が誘ってきた。

軽く膝を立てた脚をわずかに開いて投げ出し、床にべったりと尻をつけてしゃがみながら、跨るように覆い被さってくる紅衣を纏った少女の腰を両手で抱える。達紀はその華奢な身体をいきり立った怒張の真上へと導き、膣口を亀頭の先にそつと下ろした。

「んふあっ!!」

「くはああああんっ！」

触れ合った途端に電流が全身を駆けめぐる。真上からぬっぷりと包むように膣穴が亀頭

の先端を呑み込む。途端にとぼ口の褰が激しく蠢動し挿入の続きを急かす。

(ああああ、沙羅のヴァギナ……早く欲しがってるっ！で、でもまだ……)

早く奥まで突き入れたい衝動を堪え、互いの感触を確かめるようにゆっくりと彼女の身体を下ろす。速まる鼓動に充血した剛直が脈打つと、呼応するように膣褰が収縮を繰り返してたっぷり締めつけてくる。

その窮屈さに擦れ合いが密度を増して、狂おしい快感が跳ね上がった。

「ふあああ、達紀の、また膨らん……くふあ、ひ、広げられちゃうっ!!」

膨張したペニスの感触に、彼女の方がもどかしさをたぎらせ腰を突き出してきた。

——ぬちい、ぬずずずうっ!

「はううううっ! は、入るっ、奥うっ!!」

圧迫された淫汁がこぼれて陰囊に滴り、熱く濡らしてゆく。裏筋から湧き上がった灼熱が幹竿を駆け昇り脳を蕩かす。

亀頭がようやく隠れた程度から一気に、達紀の陰茎はヴァギナに呑み込まれ根本まで深々と埋まってしまった。少女の体重が、柔らかな尻房の感触と一緒に下腹へとかかる。その重みを乗せて彼女の膣奥と肉竿の先端がぶつかり合った。

「きふうっ!!」

「かはあっ!」

弾け飛ぶ快感に、喘ぎ声を重なり合わせビクンと身をわななかせた。

「ひはあああつ！ は、入ったああつ！！ 達紀のいっぱい挿入^はしちゃったあああつ！」

悦感の衝動に大輪の薔薇の花弁を思わせる真つ赤なスカートを巻き込みながら、沙羅はしなやかな脚を少年の胴へと絡みつかせ、必死にしがみついていた。

腰を支えていた達紀の腕も少女の細い背中へと回され、無我夢中で抱きしめる。

「さ、沙羅の、ふあああつ！ もう、こんな締めつけて……くあはあああつ！！」
急かすように髪をうねらせてくるヴァギナに少年が勢いよく腰を跳ね上げた。

「ああつうつ！！ やあああつ、飛んじやう、もう飛んじやうつ！」

ドレスの裾をはためかせる激しい抽送に突き上げられ、沙羅の身体が跳ねるように上下を繰り返す。ギリギリまで抜け出た極太は、絡みつく陰唇を巻き込んでずぶずぶと贅肉を抉り、悦楽のヤスリで沙羅の意識を削りながら子宮壺を思いきり弾く。

——びじゅつ！ じゅびやつ！！ ぶつじやつ！ ばずんつ！！

衣擦れに彩られた濡れ肉の擦れ合う音が次第に濃密さを増し、聖堂に響き渡る。

（くっ、ああ、沙羅の……喜んでるっ！！ 俺の……で、感じてるうっ）

往復のたびに根本から鈴口まで波打つような締めつけと、膣奥からの熱液噴射を交互に繰り返す、決るようなストロークに応えてくる。美麗な顔を切羽詰まったように強張らせながら、沙羅は瞳と口元だけをだらしなく弛ませて溢れるしずくを垂れ流していた。

「あうっ、太いの、凄いのいっぱいっ！ 達紀の奥当たってるのおっ!!」

少年への好意を知られることすら恥じらっていた気高い少女が、喜悅の叫びをあられもなく張り上げ悶え乱れる。

「まあ、沙羅ったら……姉の座を独り占めされそうですわ」

溢れ出る歡喜に引き寄せられ悠がうっとりつぶやく。義弟の手で細腰を包んでいたピスチエは剥ぎ取られ、純白のブラウスは悩ましくはだけ、美麗な膨らみを包む黒のブラジャーが露わにされていた。

十字架をあしらったネクタイを、乳首を上向かせた生意気な美乳房の上に垂らして妖艶な笑みを浮かべ、契り合う二人ににじり寄ってくる。

足首にロングスカートを絡みつかせ、引き締まった尻から陰部までも晒してしまっている。達紀の脚に跨るように膝立ちになると、悠は無防備に突き上げられ上下する沙羅の背後にしなだれかかった。

「お尻も素敵でしたけど、達紀の指で揉まれてイッてしまいそうでしたわ」

その気持ちよくなつた乳房を親友の背中に押しつけ抱きすくめる。そして黒いフリルに飾られた大きな襟を掴むと、真紅のドレスを勢いよく引き下ろしてしまった。

「はわあああっ！ なにすんのおおっ、ゆ、悠っ!？」

怒張に突き上げられた力も加わり、肩口から胸の下まで一気に脱ぎ下ろされる。ワンピース

―ストレスの下に着けていたシュミーズまで肩紐がずり落ち一緒に剥ぎ取られた。

途端に、宝玉のように丸みを帯びた真つ白な乳房が弾け出て、ストロークに揺さぶられ踊り弾む。その膨らみを悠が、いまさつき義弟にされたように両手で抱え込み揉み拉げる。

「ひはあああつ！　だ、だめ、もうお股だけで、いっぱひいっ!!」

頂上にぼつちりと屹立した乳首を指先でコリコリと転がされ、意識の点滅に声を掠れさせる。ヴァギナの快感だけでも精一杯だった神経が、親友に与えられた新たな快楽でシヨートしそうになり、沙羅は黄金色の髪を振り乱して慌てふためく。

そして達紀の身体にも恋人の誘惑が、悦楽を煽り立てていた。尻を高々と突き上げて這いつくばった真由留の顔が涎にまみれた舌を突き出し、幼馴染みのヴァギナを抉り返す達紀の極太へと迫ってきた。

「くふう、こないやらしい匂いさせて……気が変になっちゃうじゃない……」

はだけた胸元から釣り鐘を逆さにしたように撓む乳房を、恋人の腹部へと押しつけ身を振らせて擦りつける。豊肉の柔らかさで誘いながら、女陰から引き抜かれた瞬間を狙って、自分の物だといわんばかりに彼の剛直幹に舌を巻きつかせた。

「ひあああつ!!　そ、そんな……くはあああつ!」

小気味よく締めつける膣から抜け出た途端、ちろちろと擦るように舐め回される刺激に見舞われ、色合いの違う快感が休みなく肉竿を悩ませる。

「達紀兄さまのお乳も、硬くなっちゃってるよ……」

可愛らしい仕草で身を擦り寄せ、花音が甘えるようにのしかかってきた。スカートは膝までずり落ち、愛液でびちよびちよの生尻を悩ましくくねらせる。ボタンが飛び散り可憐な乳房を覗かせる自分のブラウスと同じように、達紀のドレスの胸元もはだけさせる。

そして、はしたなく弛ませた桜色の唇からヌメヌメと蠢く舌を突き出して、勃起してしまつた少年の乳首を転がした。

「ふあああつ！ だ、だめ、そんなとこ……んあはああつ！！」

擦つたい疼きが脈打ち、たまらず悲鳴をこぼしてしまふ。ドレスを纏つた女装姿が気分を高めてしまつたためか、貧乳を刺激された女の子のように甘い喜びが広がる。花音の舌に快楽を煽られ、沙羅を犯す牡部がますますいきり勃ち勢いよく子宮を弾き上げた。

「あつ、はあつ、もうっ！ お腹ずんずんくるうっ！！ あたま飛んじやううっ！ ああつ……やあああ……だめ、これ、またあ……」

乳房の甘い喜びに掻き立てられ、ヴァギナを穿られる衝撃が止めどなく高まつていた。子宮がばくばくと脈を打ち、壺を灼熱の蜜で満たしてゆく。そして子供の頃から弱い膀胱にも、危険な液がたつぷりと貯まつて沙羅の下腹を圧迫していた。

「気持ちよさそう、沙羅姉さま……。わたしも、姉さまみたいに、達紀兄さまに愛されたいな……」



この場に集う少女たちみんなが望んでいることを、素直につぶやきながら風花がしなだれかかってくる。膣を満たされ喘ぐ真紅姫の喜びを分け与えてもらおうとするかのように、細い首筋に両腕を絡め頬を寄せて抱きついてきた。

「——!! だめえっ、風花っ、そんな押しちゃ、だめえええっ!」

突き上げられた身体がのしかかる少女の重さで押し返される。踏ん張ろうと力を込めたM字開脚の脚がますます大股開きになり、スカートの前を一層広げて陰部をさらけ出す。深々と根本まで埋まった怒張がさらに奥深くへとめり込まされ、子宮を押し潰す。その圧迫感と同時に達紀の亀頭にも、狂おしい喜悦をもたらしていた。

(ぬはああっ! きゅ、急に、沙羅の膣内っ、キツくっ……!! くはあっ、ああうっ!)
肉棒を押しつけられる切迫感に感電したような震えが走り、達紀の左脚が跳ね上がった。沙羅の背後から絡みつく悠の両脚を押し開き、膝小僧がズン、と彼女の股間を直撃する。

「——!! きひいいいいあああああっ!」

その勢いに花卉がこじ開けられ、硬勃ちしたクリトリスが剥き出される。重々しい振動はルビーのように紅く充血した敏感粒ごと恥骨を盛大に震わせ、義姉の牝壺に反響した。

「んふわああっ!! お腹あ! く、くはああっ!!」

ぶちやああああっ! びしゅっ!! びぢゅうううっ!

震える両脚で達紀の太腿を締めつけながら、悠の膣穴から潮蜜が噴射された。トロリと

した熱い飛沫が膝頭を頂上に足首と腿へ向かつて流れ落ち、少年の脳裏を溶け焦がす。

(ひううう、あ、姉貴のあそこがぁ、そ、そんな擦りつけちゃっ!!)

蜜汁を溢れさせながら悠は悦楽に悶え、義弟の膝小僧に陰部を密着させたまま腰をくねらせる。掻き混ざられる液が粘りを増し、ぐっちょよ、べっちょや、と淫靡な音色を奏で、綻んだ陰裂肉の弾力を伝えた。

脚を男根のように義姉のヴァギナへとぶち込みたい誘惑に駆られ、彼は身を振らせる。全身から溢れる渴望に蠢かせた右腕が、彼の乳首に舌を這わせて覆い被さっている花音のささやかな乳房を揺さぶった。

「ふぁ、はぁあぁんっ!」

肘の内側で捏ねられ、はだけていた胸元がより一層乱される。濡れて弱まったブラウスの布地からボタンが弾け飛び、その下に着けた純白のキャミソールもくしゃくしゃに振れて、淡雪のような小振りの乳房を放り出してしまった。

ぷるるん、と可愛らしく揺れ、すでに桃色の小粒を勃起膨らませた美麗な膨らみは、少年の二の腕に捏ねられ拉げられる。

甘い声をこぼし幼い顔をしかめる少女の胸を弄びながら、少年の手はぐったりと綻んだ彼女のヴァギナへ指先を忍び込ませた。

「はぁあっ!? ひっ、いいいいいんっ!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>